

四国インターハイ  
50のチカラ



⑭

大島 孝貴さん(17) 生光学園高3年

## 仲間の完全燃焼を願う

1年生の夏ごろ、学校推進委員会の委員長就任を学校側に打診された。インターハイ(IH)が何かも知らなかったが、「人の役に立つなら」と引き受けた。校内でIH出場を決めた選手が出たので、顔写真入りのPRボードを廊下に掲げる。生徒の応援メッセージも張ってムードを盛り上げる。

自身は運動部に入っておらず、父が営む道場で「明心流みょうしんりゅう」の手を小学校1年から習っている。2時間の練習を週4回続け、鳴門市で開かれる年1回の大会では形で10連覇し、組手でも頂点に立った。「心技体全てが鍛えられ、他人や自分を守るようになる」と魅力を語る。

競技を通して学んだのは練習の大切さ。「本番ではなかなか実力を発揮できない。インターハイが最後の大会になる生徒もいると思う。悔いのないよう、しっかり練習してほしい」  
生光学園には体育コースがあり、女子柔道、陸上(投てき)、新体操が県内トップレベルを誇る。5時間目の授業が終わると6時間目ではなく一足先に部活動が始まる。今夏のIHや、その後の主要大会など目標はさまざま。普通コースの自身は学業に励みながら、ひそかに憧れる体育コースの仲間たちの活躍と完全燃焼を願っている。

(宮本真)